

遠藤太美男氏のお話

我が家には鴟目に3反歩の畑があり、その他にも下一栗の方々の野山（ノザン）があった。800m上流には木造の下鴟目橋があったが、少しの水増しでしょっちゅう流出していた。昭和22年のアイオン台風では江合川の左岸堤防が決壊し田んぼの流出も膨大な面積となった。

そのようなことを幼少の頃から見てきたが、アイオン台風の時は17歳の頃だったと思う。

仙台のフカマツ組（土建会社）に就職して吊り橋架橋技術などを身につけたとき、工事現場の上司に相談したら、中古のワイヤーロープを無償で譲り受けられることになった。

25歳か26歳の頃である。

吊り橋右岸元の山口一郎氏は大変喜ばれ、物心両面の支援をいただいた。その橋ができることにより恩恵を受ける下一栗の人たちや近郷の方たちと一緒に架橋に精を出した。

ついに、昭和31年に全長約120mの絵図沢の吊り橋が完成した。しかも経費はほとんどゼロに等しいものであった。

予算無しのほか、セメントなど資材は高額のためコンクリートなどで土台は打てなかった。そのため、穴を掘り石を敷き詰め基礎を作るなど、工夫と相当の労働力による大労作であった。

その後管理は主に山口一郎氏によって行われ、ワイヤへの注油や床板の交換など頻繁に行われたようである。

下鴟目橋が現在のコンクリート製になってからは車の時代となり、吊り橋を利用する人は山口一郎宅の家族以外になくなり、今は朽ち果てて渡ることはできない。

